

昔むかし、あるところに、王さまと美しいおきさきさまが住んでいました。ふたりには、王子さまがひとりありました。

王さまは、おきさきさまを深く愛していました。ところが、王子さまがまだ小さいうちに、おきさきさまがなくなってしまうました。王さまは悲しみ、一年がすぎても新しいおきさきをむかえようとはしませんでした。

ある日のこと、ひとりの魔女が、魔法の力でたとえようもなく美しい娘になって、王さまのお城にやってきました。魔女は、ペールを深くかぶり、王さまに結婚したいともうしました。けれども、王さまの心を動かすことはできませんでした。

魔女は、うらみをいだいて帰っていききました。そして、暗くまずしい小屋にもどると、かまどに火を起こし、集めてきた薬草やくそうをなべに入れてぐつぐつ煮はじめました。それから、恐ろしいことばで、薬草にのろいをかけたのです。

たちまち、雪がはげしくふりはじめ、あたりは、すさまじいふぶきにつつまれました。かみなりが鳴り、恐ろしい音がとどろきました。

王さまのお城も、すっぽりと深い雪にうずもれてしまいました。そして、雪がお城をおおいかくしたとたん、お城は大きな岩の塔にかわり、王さまや王子さま、おつきの人たちはみな、まっ黒なカラスになってしまいました。

魔女はさげぶようにいました。

「王よ、聞け。おまえは、ひとりのおとめが、ふうがわりな馬車に乗って凍こおった湖をわたり、岩の城の中に入って、年とったカラスにすがたを変えたおまえに口づけするまでのろわれつづけるのだ」

それからというもの、カラスたちは、少しも休むことができず、雪の中にそびえる岩のまわりを飛びまわっては、悲しそうに、カアー、カアーと鳴きつづけるのでした。

その岩の塔には、大きな穴あなが開いていて、そこから水がわきだしていました。水は、やがてお城の庭を湖にかえ、湖は一年じゅう凍りついていました。

さて、魔女には娘がひとりいて、この娘も意地の悪い魔女でした。ただ、とても愚おろかだったので魔法を使うことができず、まずしい木こりの女房になりました。夫婦は仲が悪くて、いつもけんかばかりしていました。

木こりには、前の女房との間にうまれた娘があつて、とてもかわいがつていました。魔女の女房は、この娘にいつもつめたくあたり、つらい仕事ばかりさせました。

木こりのうちでは、ねこをいっぴき飼っていましたが、まっ白な子ねこを四匹生むと死んでしまいました。木こりの娘は、四匹の子ねこをだいじに育てました。

ある日のこと、女房が娘に、

「その子ねこたちを殺しておしまい。あのこおつた湖に穴をあけて、水の中に落としておぼれ死にさせるんだよ」と、命じました。

むすめは、悲しくてたまりませんでした。しかたなく四匹の子ねこをふくろにいれて、こおりついた湖へ出かけていきました。

湖の岸に着くと、娘はおので氷をわりました。でも、子ねこたちを穴に落とすことなにかできません。むすめは氷の上に身を投げだして、はげしく泣きました。そしてそのうち、気を失ってしまいました。

どのくらいたおれていたでしょう。

「乗りなさい、乗りなさい」

むすめの耳に、だれかのよびかける声が聞こえてきました。はっとして目を開けると、そこには、きれいな金色のそりがありました。そりを引いているのは、四匹の子ねこです。娘は、子ねこたちをやさしくなると、そりに乗りこみました。子ねこたちは、そりを引いて走りはじめました。

そりは飛ぶように走り湖の上をかけぬけていきます。氷がギシギシと音を立ててきしましましたが、そりはうまく湖をわたりきって、むこう岸につきました。

そりは、岩の塔の穴の中に入つていつとまりました。娘がそりからおりとたん、子ねこたちはまたそりを引いてどこかへすがたを消しました。娘は、穴の中を探しまわりました。でも、そりや子ねこたちのすがたはどこにもありません。どこを見ても、こけむしてごつごつした岩ばかりです。

そのとき、ほら穴のおくのほうに、明かりがふたつ、ぼんやりともっているのが見えました。

(あれはいったい何かしら)

娘は少しもこわがらずに、明かりのほうへ歩いていきました。すると、年とつたカラスが一羽、大きな声でガーガー鳴いていました。首にほうたいをまいています。

「まあ、こんなところにカラスがいるわ。かわいそうに、けがをしているわ」
娘はそういうと、カラスをうでにだいて口づけしました。

そのとたん、世界がこなごなにくだけちるかと思うほど、すさまじい音がとどろきわたり、岩が今にもくずれそうになりました。

気がつくと、娘は大広間のまんなかに立っていました。目の前にひとりの王さまがいました。王さまは、うやうやしく娘に口づけをしていました。

「あなたは私を救ってくれた。どうか、私の王子と結婚して、私の国の王女になってくれまいか」

やがて、せいだいなお祝いの宴会が開かれました。

私もその宴会にまねかれていっしょにごちそうになったんですよ。でも、料理をとろうとお皿にかがみこんだとき、お皿の中におっこちてしまっただけ。それをコックがあまった肉とまちがえて、まずしい人にくれてしまった。まずしい人は、私をふくろにつめると、ここまで運んできたんですよ。わたしがこのお話を知っているのは、そういうわけなんです。

村上郁再話

資料『世界のメルヒェン図書館4』小澤俊夫編訳／ぎょうせい